

氏名・（国籍）	GOLDING, Corin（英国）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	博甲第29号
学位授与年月日	令和6年3月13日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	Restriction and exclusion in Indian Buddhism: A study of the <i>icchantika</i> in the <i>Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra</i> and other <i>Tathāgatarbha</i> texts
論文審査委員	主 査 教授 デレアヌ フロリン
	副 査 教授 幅田 裕美
	副 査 教授 藤井 教公

論 文 内 容 の 要 旨

This study traces the emergence in Indian Buddhism of a class of person (Skt. *icchantika*; Tib. ' *dod chen po/pa*; Chin. 一闡提) who is denied the capacity to achieve awakening. At the same time, and in the same corpus of texts, the teaching was introduced that all beings have the potential to become Buddhas (that is, all beings have e.g., *tathāgatarbha*/**buddhadhātu*). The figure of the *icchantika* is well known within the Buddhist world, as also within the world of Buddhist Studies, especially in East Asia, where it was the subject of much controversy, primarily in China. Several modern studies of the *icchantika* exist, in western languages and, perhaps more voluminously, in Japanese. However, the overwhelming impression from the scholarship is that the *icchantika* contradict the fundamental principle of *Tathāgatarbha* thought, namely that all beings have Buddha Nature. At the same time, the pivotal relationship between the *icchantika* and *bodhihetu* has, at best, been underemphasised, and in most cases, neglected or misunderstood; the logic by which the lack of *bodhihetu* connects with the many other characterisations of the *icchantika*, primarily that they lack wholesome roots (e.g., *sarvakuśalamūlotsarga*) and reject the (new) Buddha Dharma (e.g., *sūtrapratikṣepa*), has yet to be pursued in any sustained manner. It is the primary purpose of this thesis to correct this omission.

Of course, the *icchantika* did not emerge in a vacuum. I therefore locate my study within a wider analysis of categories and discourses of exclusion in Indian Buddhism,

tracing some of the possible antecedents and relatives of the *icchantika* found in the Pali tradition and the Yogācāra. While the figure of the *icchantika* continued to occupy a prominent place in the commentarial traditions in China for several centuries, in India, their career seems to have been somewhat more short-lived and restricted mainly to references in the *tathāgatagarbha* literature. I finish by surveying some of the most important of these, noticing shifts in register and nuance as each text in its own way reflects the tensions that the category creates in their wider philosophical frameworks and the struggles they go through to resolve those conflicts.

In addition to the developing thematic of social and soteriological exclusion, taking us from specific injunctions on who may qualify as a monastic to the incapacity to achieve Buddhahood, I frame the analyses of the *icchantika* around the following sets of tensions in the *Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra*, which, though often presented in the literature as a contradiction, are, I argue, fundamental to the logic of that text: *icchantika-Bodhisattva*; *icchantika-buddhadhātu*; and, *icchantika-bodhihetu*.

論文審査の結果の要旨

「一闡提」は、佛教史上で最も論議を呼んだ概念の一つである。その意味内容は、時代や文献によって多少変化するものの、語源は、サンスクリット語（佛教梵語或いは北インドの俗語か）の *icchantika*（「欲求しつつある者」と通常解せらる）という語を音訳したもので、チベット語では、' *dod chen po/pa* = 「大いなる食欲をもつ者」等と訳され、漢訳では、上記の音写に加え、「断善根」、「信不具足」、「極欲」、「無信」等とも意識される。最も普通にみられる解釈によれば、「一闡提」とは、佛法、特に大乘の教えを信じず、それを誹謗し、成佛できない極欲非道なる者を云う。

歴史的には、*icchantika*の最初の用例は、所謂「大乘『涅槃經』」（サンスクリット語題名：*Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra*）の前半部分に見える。ところが、一闡提という教義は、一切衆生が成佛できるという大乘佛教の理念に反するもので、「大乘『涅槃經』」が五世紀初めに漢訳されて以来、中国をはじめ東アジア佛教圏で激しい議論の対象となり、現代の佛教学界、特に日本の研究者の間でたいへん注目され、その真義を探る諸説も加えられた。

又、欧米でも、「生きとし生けるものは凡て悟りが開ける」という理想は、佛教全体の大前提であり、普遍的な価値観だと見られている風潮の中で、「一闡提」はこの理想とは余りにも懸け離れている。何故、このような極端な思想が成立したのか、または、一時的とはいえ、大乘仏教、とりわけ如来蔵系の文献の中で掲げられたかについて、大きな関心が寄せられている。にもかかわらず、この問題の全貌を解明するような研究は、欧米では未だ発表されていない。

本論文は、正にこの学術的な空白を埋めるべく、インド佛教に於ける「一闡提」を中心に

排他的な思想の成立と展開を分析し、その歴史をトレースしようとする意気込みから生まれた研究である。

まずその序論 (Introduction, 5-19頁) では、「一闡提」研究の意義と方法論が述べられ、更に「大乘『涅槃經』」に於ける一闡提問題を中心とする先行研究 (欧米並びに日本) が網羅的に紹介されている。序論と結論に加え、本論は、二部から構成されている。

「第一部」では、「一闡提」誕生の歴史的背景ともいべきインド佛教の排他的傾向が検討されている。「第一部」「第一章」(本論 21-35頁) では、初期佛教 (Early Buddhism) 文献の幾つかの用例に焦点をあて、*Vinaya* (*Mahāvagga* Vin I 85-91) や *Milindapañha* (Mil 310) 等を基に、僧団から排除されるべき、または出家が許されぬ二十種の人間という戒律規定が考察されている。

第二章では、今迄は一闡提との類似性がほとんど注目されなかった瑜伽行派 (Yogācāra Buddhism) (本論 36-54頁) 関連の論書にみえる *agotrastha* 「住無種姓」や *aparinivāṇadharmaka* 「不般涅槃法者」という概念が指摘され、*Yogācārabhūmi* 中の *Śrāvakabhūmi* 『瑜伽師地論』「声聞地」の用例が詳しく分析され、更に、*Mahāyānasūtrālaṃkāra* 『大乘莊嚴經論』に於ける *agotra[-stha]* 「無性〔位〕」、即ち大般涅槃の要因が欠けている (*aparinivāṇadharmaka*) というカテゴリーも紹介されている。

「第三章」(本論 55~73頁) では、一闡提思想の理解に欠かせない「善根」(*kuśalamūla*) や「菩提因」(*bodhihetu*) 等の教義が論述され、初期佛典のほか、『大毘婆沙論』や『俱舍論』等のアビダルマ文献の用例も分析がなされている。

第二部 ‘Pursuing the *Ichchantika*: From monastic threat to salvific ideal’ 「一闡提変遷を追跡して一僧団に対する脅威から救済理念に至るまで」(本論 74-207頁) は、「大乘『涅槃經』」をはじめ、如来蔵經典類に於ける一闡提の展開を詳述している。「一闡提」の歴史を更に複雑にさせているもう一つの要因は、「大乘『涅槃經』」自体の成立と流布である。

「大乘『涅槃經』」前半部では、一闡提が成佛できないと断言しているにもかかわらず、同じテキストの後半部では、一闡提でも佛性が具わっており、成佛ができるという可能性があり、または救済の対象となり得ると説かれている。「大乘『涅槃經』」後半部では特に「一切衆生悉有佛性」という如来蔵 (佛性) 思想の根本教義が強く現れ、最終的には一闡提にも成佛できるという結論が導かれざるを得なかった。

実は、「大乘『涅槃經』」のテキストは、*Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra* の梵文断片のほか、法顯訳『大般泥洹經』六卷 (416-418年漢訳) や曇無讖 (Dharmakṣema) 訳『大般涅槃經』四十卷 (421-431年漢訳)、Jinamitra、Jñānagarbha、Devacandra等の蔵訳 *Yongs su mya ngan las ' das pa chen po' i theg pa chen po' i mdo* (9世紀前半翻訳) 等、幾種の異なったバージョンで現在に伝わっており、極めて煩瑣な成立過程を物語っている。その背景を基に、「一闡提」と「一切衆生悉有佛性」のような相矛盾している教義の整合性は、甚だ理解し難いもので、従来の学僧や註釈家を悩まし、更に現代の研究者にとってもたいへん難解な問題を呈している。

今迄はこの問題の解決に取り組んできた多くの研究者は、「大乘『涅槃經』」の文献成立史

を復元しようとし、多重層を想定する諸説を立てている（主な学説は本論文76~80頁でも紹介されている）が、現時点では、学界で広く支持されている決定的なモデルまでには至っていない。

本論文では、このアプローチとは多少異なる方法が用いられて、「大乘『涅槃經』」の思想内容、とりわけ「一闍提」の概念を、全ての現存バージョンに共通している教義と、曇無讖訳『大般涅槃經』のみで見られている独特な教義とを別々に考察している。「第二部」第四章は、前者に焦点をあて、第五章では後者が詳述されている。

「第二部」第四章では、一闍提という概念の起源（本論 89-104頁）のほか、「一闍提」にまつわる幾つかの代表的なテーマを説述している。例えば、「大乘『涅槃經』」の思想及びその担い手を誹謗し、またその僧団を脅かしていた実際の存在としての *icchantika*（本論 104-108頁）や波羅夷罪（*pārājika*）及び無間業（*ānantarya*）を犯している一闍提のイメージ（本論 108-110頁）、善根を断った者としての一闍提（本論 110-111頁）、または、大乘佛教を守る戦いの呼びかけとしての一闍提と無信のテーマ（本論 111-115頁）等がそれである。最後に、一闍提の理解の鍵となっている、『大般涅槃經』にみえる *buddhadhātu*「佛性」並びに *bodhihetu*「菩提因」という概念の定義と用例が引用され、検討されている（本論 115-127頁）。

「第二部」第五章（本論 129-170頁）は、曇無讖訳『大般涅槃經』に於ける独自の思想展開、殊に大乘佛教全体の脅威としての一闍提の位置づけや成佛の可能性が開ける一闍提概念の再解釈（如来蔵思想と整合性を試みるパラダイム）を豊富な用例を基に説示している。

「第二部」第六章（本論 171-207頁）では、「大乘『涅槃經』」のほかの代表的な如来蔵系文献、即ち、*Āṅgulināliyasūtra*『央掘魔羅經』や *Ratnagotravibhāga*『宝性論』、*Laṅkāvatārasūtra*『楞伽經』にみえる一闍提思想の理解と新たな展開が考察されている。『央掘魔羅經』は、一闍提が「邪定者」（**mithyātvanīyata*）と従来の理解を提示している一方、それを極めて珍しい（「稀有」と漢訳されている）存在だとし、実在している者の影が次第に薄れつつある歴史的段階を反映している。

『宝性論』でも、一闍提を「輪廻を望んでいる」（*saṃsāram icchanti*）者や「佛法を妨げる」（*dharmapratigha*）者とされながら、その根本的な欠点を直すのに、*adhimukti*「信解」（本論文では、*earnest application leading to conviction [in Mahāyāna]*）と英訳されている）等の修行が勧められ、最終的には、一闍提にも救いの道があると説かれている。

「一闍提」の理解は、最終的に辿り着いた段階が『楞伽經』なのである。本經に拠れば（Nanjio ed. 63ff. 参照）、一闍提には二種がある。第一は、従来の一闍提の理解に従い、全ての善根を捨てた者（*sarvakuśalamūlotsarga*; cf. 漢訳：「捨一切善根」T 16. 597c. 11）で、涅槃〔に到達できる〕系統の特徴が無い（「此は無涅槃種性相」T 16. 597c. 16）ものとされている。第二は、「菩薩一闍提」（*bodhisattvecchantika*）であり、自らの意思で善根を修せず、一切衆生の救済のために敢えて涅槃に入らず、永く菩薩行を担いつづけられる者である。更に、佛や菩薩の力で以て、「捨一切善根」の一闍提でさえも救われる対象となり得る。このように、一闍提は完全な形で如来蔵思想の理念に融合された概念になる。

本論文の「結論」(208-211頁)の中では、序論で提示された主な研究項目がどのような形で究明されたかということが明記され、更に今後の研究課題も提示されている。最後に付録として、Appendix 1 は、「大乘『涅槃經』」の諸本共通の一闡提及び菩提因関連箇所原典テキスト(梵・藏・漢)を集めており、更に英訳も載せられている。又、Appendix 2では、曇無讖訳『大般涅槃經』に於ける独自の理解や展開を記録するものである。

本論文は、まだ幾つかの構造的な不備や理解不足の箇所等が残っているものの、全体としては、一闡提研究に大きな貢献をなしていると思われる。インド佛教史に於ける一闡提という概念を第一次資料に基づいて詳しく紹介し、網羅的に考察している欧米では初めての試みとも云える当研究は、高く評価できるだけでなく、日本の佛教学からみても新しい成果を生み出したと思われる。後者については、主な三点だけの指摘にとどめることにする。

(1)「一闡提」という概念は、突然インド佛教に現れたものではなく、初期佛教以来続いている排他的な思想の延長線で形成されたものであろうとの指摘。

(2)「一闡提」と瑜伽行派の「不般涅槃法者」や「住無種姓」等との類似性と分析。

(3)「一闡提」を如来藏思想に完全な形で包含せしめた主な理由は、「菩提因」という概念と深く関わっている可能性の指摘。「断善根」等と定義されているにもかかわらず、一闡提には佛性が欠けているというよりも、むしろ菩提因がないと理解される事が多い。如来藏思想が広まるにつれ、結局のところ、「一闡提」にも佛性があると認められ、信解等を修し、或いは佛菩薩の力を借りれば、もともと欠けていた菩提因も現れ、やがて成佛の道も開けるという理解に至ったのではないかと考えられる。

*

令和六年三月四日午後2時から午後3時10分までの約70分にわたり、提出論文についての口述試験を厳正に実施した。主査・副査から、提出論文の優れた貢献が評価されたとともに、部分的に補正を要する箇所の指摘もなされた。

口述試験終了後、主査・副査の合議の結果、本論文は、主なテーマである「一闡提」という概念の歴史背景やインドでの展開等を第一資料と先行研究に基づき、厳密な分析を行い、佛教に於ける排他的傾向の研究に大きな貢献をなすと認められた。

本審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するに相応しい成果であると判断する。